

幼小連携学習開発部会 実践報告



幼小連携学習開発部会 実践事例1 (Aグループ 保育)

主題 「感じて遊ぶの楽しいな！」(幼稚園4歳児)

1. 子どもの姿と保育者の援助

(1) 表現に関する姿から

後期に入り、個々に差はあるが自分の思いを十分に出して遊び、登園した時から目的をもってやりたい遊びにとりくむ姿がよく見られる。また、新しい道具や素材に対して敏感に反応し、積極的に試して遊ぶ姿も見られる。さまざまなものに飛びつく子どもたちが多い一方で、新しいものに抵抗する姿や、興味が持続せず別のものへすぐ移るといった姿もよく見られる。4歳児らしい自由奔放な姿を大切に、いろいろな素材・道具を使えるようにしたり、豊かな体験ができるようにしたりなど考えている。また個に応じていろいろなものを受け入れられるように援助したり、じっくりと遊べるようかかわったりしたいと考えている。

<感じる力に関して>

先にも述べたように、新しいものに対して敏感に反応したり、自然の変化にも鋭く感じ取ったりする子どもの姿が見られる。紅葉した葉をごちそう作りや製作遊びに使ったり、天候によって状態の違う土を使い分けて泥団子をつくったり、感じたことを友だちや保育者に伝えたりなど、感じ取ったことからイメージをふくらませて遊びに取り入れたり、表現したりする姿も多く見られる。しかし「わぁ！」と感動したのもつかの間、すぐ別のものへ興味が移ってしまう姿も多い。いろいろなものに興味をもてる姿を認めながらも、4歳児なりに楽しみながらじっくりと感じて遊ぶ体験ができるようにして、感じる力をより育みたい。

<イメージする力に関して>

ままごと遊びや、テレビのキャラクターごっこ、忍者ごっこなど、イメージをふくらませ、そのものになりきって遊ぶ姿がよく見られる。子どもたちのイメージに共感したり、イメージを刺激するような教材を準備したり、なりきって表現している姿を認め、工夫しているところなどほめたりして、十分にイメージできるようかかわっている。更に友だちとイメージを共有して楽しめるように、自分のイメージを伝え合えるように援助したり、みんなでイメージしながら話をつくったりするなど試行錯誤しているところである。

<自分の思いを表す力に関わって>

- ・感じたこと、イメージしたことを遊びの中で歌ったり、つくったりかいたり、体で表現したり、言葉にしたりいろいろな方法で表す姿が見られる。あるいはぬたくり遊びや砂遊びなど思いつくまま思い切り発散しながら表現する姿も見られる。早急にきちんとした表現をさせるのではなく、思い切り感じたことイメージしたことをその子らしく表せるような場を保障し、表現する喜びを味わえるようにしたい。その上で、いろいろな方法で表す楽しさが感じられるように、子どもの姿に応じてさまざまな教材を準備したり、使い方を知らせたり、楽しい雰囲気の中で遊びや生活に必要な技術が獲得できるように工夫したいと考えている。
- ・自分の思いを表すのが精一杯で、周りの状況や友だちの気持ちに気づかなかったり、直接友だちに思いを伝えられずに保育者に頼ろうとしたりする姿がよく見られていた。しかし最近少しずつ、安全に楽しく過ごすためのルールに気づいたり、友だちの気持ちを

受け入れようとしたり，直接思いを伝えようとしたりするようになってきつつある。そのためのけんかやトラブルを大切に受け止め，十分に自分の気持ちを伝え合う中で，友だちの気持ちや周りの状況のことに気づき，どうすればよいか考えられるような機会を意図的につくるよう配慮している。

(2) 主題「感じて遊ぶの楽しいな！」にかかわって

- ・さまざまな感覚を刺激するために，いろいろな遊びを体験できるようにしてきたが，子どもたちは目の前で見えるもの・ことに対して鋭く感じるができるが，その他の感覚をつかって感じる体験が少ないように思われる。そこで，この度は「風をつくったり感じたりして遊ぶ」体験をできるようにしたいと考えた。季節がら風が強くなってきたことと，「見えないものを感じる」力を育てていきたいと考えたためである。さまざまな感覚をつかって感じ，イメージし，自分の思いを表した体験を少しずつ積み重ねることが，将来「表現する力」を深めていくことにつながるであろうと考える。
- ・最近クラスみんなで楽しんでいる「忍者ごっこ」のイメージを生かし，楽しい雰囲気の中で「風を感じる」体験をさせたいと考えた。これまでも「風になってみよう」と身体表現をしたり，「風をつかまえよう」とバルーン遊びをしたり，『北風と太陽』の話の聞いたり，さまざまな体験ができるようにしてきた。今回は『忍法風の術！』として，自分たちで風をつくって周りの変化を楽しんだり，友だちがつくった風を感じたりして楽しめるようにしたい。このような活動を重ねていく中で，「感じる力」が育ち，普段の生活の中でもいろいろな「風」に気づいたり，その他のものに対してもふと心を動かせたりするのではないかと考えている。

2. 保育の実際

(1) 日時 平成15年12月5日

(2) ねらい

- ・体を動かして風をつくったり，周りの様子を見たり聞いたりして，風を感じて遊ぶことを楽しむ。

(3) 環境と援助

- ・自分たちで風をつくるということ，安全面など配慮し，遊戯室を使用する。
- ・忍者の話をしながらか，イメージをふくらませ，『忍法風の術！』遊びへの期待がもてるようにする。
- ・遊戯室での過ごし方の約束を思い出せるように話をしたり，友だちとぶつからないように空間を使えるように声をかけたり援助したりして安全に遊べるようにする。
- ・「どうすれば風がつかれるか」をそれぞれが話をしたり，やってみたりして工夫できるように，話を聞いたり材料を準備したりしておく。(段ボール・うちわ・ビニール袋など。)材料は最初から出しておかず，子どもの様子を見ながら使えるようにする。また，友だちがやっている姿を見て刺激しあったり，認め合ったり真似したりできるように声をかける。
- ・友だちがつくった風を感じられるように，交代してみたり，場所を工夫したりす

る。また、感じたことを友だちに伝えられる場をもうけ、言葉で表すきっかけをつくったり、いろいろな感じ方を認め合ったりできるようにする。

- ・風で動く様子が見えるように吹き流しなど天井からぶら下げておく。
- ・一人一人が感じていることに共感したり、認めたりして、のびのびと遊べるようにする。

(4) 子どもの姿

<エピソード1>

忍者のイメージがふくらんできたところで、「風の術ってどんなのだと思う？」と聞くとA男「水をまけばいい！」と言う。「えっ水？どうして？」と聞くと、A男「水をまくとね、そこから雲になって、雲から風が出てくるんよ」と言う。ふうんと感心しながらどうしたものかと思っていると、今度はB男が「火を燃やせばいいよ」と言う。「えっ火？どうして？」と聞くと、B男「火を燃やすと煙がでて、それが雲になって風ができるんよ」と言う。周りの子どもたちも「知ってる！焼きいもしたとき、上に煙が出て、風ができとった」と言う。「そうか、みんなよく知ってるし、前にあったこと、覚えとるんじゃないねえ。こないだ『北風と太陽』のお話では、雲が風つくったしねえ。でも遊戯室で水まいたり、火をたいたりしたら大変なことになって危ないよ。他に身体を使って風つくれないかなあ」と話す。どうすればいいのかわからない、という雰囲気になる。

予想外に4歳児には難しい科学的な話が出てきたのには驚いた。絵本やテレビで見聞きしたこと、焼きいもなどの体験から、水や火があれば風ができると想起したのであろう。一部の子どものことではあるが、体験が生かされていると言える。一つの体験が別の遊びへつながっていくことをきちんと整理しながら、ふさわしい体験とは何かを考えていきたい。

ただ、この時は身体全身を使って風をつくるだろうと考えており、保育者の方から「身体で」と声をかけたが、子どもたちにはイメージがわきにくかったようだ。「風の術」のイメージをふくらめたり、共有したりできなかったためであろう。もう少しゆったりと、水や火の話を受け止めたり、いろいろな風の話の話を聞いたりして、イメージをふくらませることが必要ではなかったかと思う。

<エピソード2>

「風をつくってみよう」と声をかけると、保育者の真似をして手をパタパタと振っている姿や、風になったつもりで走り回る子どもの姿が見られた。「走ったら風ができるよ！」と言う。しばらく身体を使って風をつくるようにしたかったが、走り回る子どもの人数が増え、追いかけてこのようになってきたため、風を作れるような段ボールや団扇などの材料を出した。するとすぐに材料に飛びつき、取り合いを始めた。吹き流しを引っ張り回したりする姿が見られた。「交代で使うのよ」「吹き流しを触らないで、風の術で動かしてごらん」などと声をかけると、段ボールなど使って風をつくることを楽しむ姿も見られたが、目の前にあるものをとにかく触ってみたいかたがないという子どもたちも多かった。

「風をつくる」と言われても4歳児には難しかったのだろう。保育者を真似る姿、以前体験したことを繰り返す姿、物を媒介とする姿が見られた。

保育者や友だちの姿を真似ることも表す上での大切な体験である。相手の思いを感じ取ったり、4歳児なりに推測したり見たことを身体で同じように表したりしながら、感じる力や、イメージする力や表す力が育つのだと考える。

材料に飛びついて、とにかく触って動かしてみる子どもたちは、物を媒介として、やってみることで感じ、イメージし、表しているのである。いろいろな子どもの特徴を生かしながら、画一的ではない「表現する力」を育てていきたいものである。

<エピソード3>

子どもたちが風をつくりはじめると、「すずしい！」という声が聞かれた。保育者が子どもの前に顔を近づけると、手や段ボールなどでそれぞればたばたと扇いでくれる。「ひゃー、風がきてる。風がつくれたねえ」と声をかけると嬉しそうな表情になる。それを見て友だち同士で扇ぎ合っている姿も見られた。

吹き流しを扇いで「見て！動いた！」と友だちと見せ合う姿も見られた。

見えないものであるが、涼しさや物の動きで風を感じ取っていた。子どもたちは普段の生活の中でも、何気なく見えないものなど感じ取っているのだと思うが、今回のように「風」などにしぼって、少し意識して感じられるようにすることも必要ではないかと思う。4歳児には少し難しかったかもしれないが、このような体験も重ねることで、幅広く感じる力を高めていきたい。

<エピソード4>

最後に子どもたちを集めて忍者のイメージがよりふくらむように、『忍者かんべえ』の話をし、「いろんな『風の術』をやったねえ。今日は風がつくれちゃったよ！お話の中の忍者かんべえよりも先に、さくら組さんの方が忍者になれるかもねえ」と言うと、ぱあっと嬉しそうな表情になる。忍者になりきって遊戯室から保育室へ帰ることにすると、それぞれ忍び足をしたり、はいはいをしたりして、なりきって保育室へ向かっていた。

風など何かを感じるという体験だけをとりあげるのではなく、例えば忍者というような一つのイメージの中で楽しく遊びたいと考えていた。訓練のようにして力を育てるのではなく、楽しい雰囲気の中で、いろいろな角度からイメージを広げたり深めたりしながら、さまざまな力を育てていきたい。

3. 成果と課題

- 幼稚園では「感じる力」「イメージする力」「自分の思いを表す力」を特に大切にしていこうとしている。これらの力は幼稚園のどの遊びの中にも出てくると考えられるが、主題を「感じて遊ぶの楽しいな！」と設定したことで、感じる力を育てていく遊びにはどんなものがあるか、小学校の教員も一緒になって考えることができた。4歳児には少し難しいものになってしまったが、今後は感じる力、イメージする力、自分の思いを表す力を育てていくために、その年齢にふさわしい遊びを考えたい。

1. 研究の視点

この度、幼稚園と小学校の表現活動につながりを持たせ、子どもたちの表現力がより豊かになっていくための基礎作りとして小学校低学年に「表現科」を新設した。本題材では校内の落ち葉や木の実などの自然物を使って遊んだり何かをつくったりする活動を体験する中で、あらゆる感覚を働かせそこから体中でしっかり感じることを大切にしていく。また、音楽的・美術的・言語的・身体的などの表現方法から自分にあった表し方を選び、表現活動を行うことで、子どもたちは感じたことを表すことの楽しさや充実感を味わいながら、より豊かに表現したいという意欲や実践力が高められていくであろうと考える。

本学級の子どもたちは歌ったり踊ったり絵や工作に表したりという活動について、楽しく活動する姿が見られる。しかし、時には直感的なひらめきでの表出のみで満足してしまったり、同じような表し方を多くの子どもたちがしてしまうものであったりというように多様な表し方にならない場合もある。また、「表現」ということを中心とした活動をまとめて一定期間行った経験はこれまでになく、表現するとはどういうことなのかについて様々な表現活動を体験する必要がある。

学習集団としては、心も体も開放して一人ひとりが活動に没頭し表現することの楽しさを味わうことのできる集団ををめざしていきたい。本学級の子どもたちは、グループ活動では、意見の衝突や食い違いがみられながらも話し合いながらまとめようとする姿もみられつつある。しかし、全体の活動の中で自己を表出する場では、注意を引きたいがためか、そのとき決められた約束事を守らないで自分の思いだけで突っ走りがちな子どももいて、まわりの子どもたちが戸惑ってしまうこともある。子どもたちの多くは積極的に自分を表現することを好んでいるが、中には戸惑いや恥ずかしさなどから尻込みしてしまう子どもたちもいる。一人ひとりの子どもたちが活動内容にひたりきり、その楽しさをグループや学級全体で共有できるような活動を仕組みたい。

指導に当たっては、感じることを大切にし、イメージしたことを自由な発想で開放的に表現できる場を設定するようにする。そのために木の葉をたくさん用意するようにしたり、活動に浸りきれるような時間をしっかり確保したりするようにする。そして、あらゆる感覚を働かせる活動を意図的に仕組んでいく。また、あらゆる表現活動(音楽的・造形的・身体的・言語的など)に結びつくような材料も準備しておき、自然発生的に感じたことを言葉や音や絵や動きなどに表しやすいようにする。また、どのような表し方が可能であるのかを子どもたちに示し、「音」「色・形・質感」「動き」「言葉」での表現を一通り体験した後に自分なりにおちばランドや校庭での遊びから感じた表現方法を選択し表現できるようにする。また、一人ひとりが自分の心に問いかけ、じっくりと取り組むだけの時間の確保と材料の準備をし、友だち同士自由な発想を認め合うことで、自信を持って自分なりの表現をすることにつながると考える。

2. 単元の目標

「おちばランド」を中心とした校庭で、季節を感じながら遊んだりつくったりする活動を通して、体験したことをもとに感じたことを友だちと協力しながら様々な方法を組み合わせる表現しようとする力を育む。

3. 活動計画（全20時間）

第1次「校庭の自然にもっとふれて遊ぼう」 (6時間)

○たくさん集めた落ち葉のじゅうたんを中心に、校庭で季節の変化をあらゆる感覚で感じながら遊ぶ。
・落ち葉や木の葉を使って遊んでみよう。
・落ち葉のじゅうたんを体中で感じてみよう。
・校庭の木の葉、木の幹の感触などを味わおう。

第2次「遊んだことをもとにして いろいろな方法で表そう」 (12時間)

○これまで自分たちが遊んだことをもとに、様々な感覚で感じたことをもとにして様々な方法で表す。
・どんな方法で表したか、思いつくまま挙げてみる。
・友だちと協力しながら、音、絵や立体、動き、言葉などから選んで組み合わせる。

＜造形的な活動＞

・みんなで「落ち葉ランド」の看板を作ろう。
・感じたことを色や形に表現してみよう。

＜音楽的な活動＞

・集めたものや身の回りのもので音遊びをしよう。

＜身体的な活動＞

・風の動きや葉っぱの舞い散る様子などを体で表現してみよう。

＜言語的な活動＞

・様々な感覚で感じたことを言葉で表現してみよう。

第3次「みんなが表してきたことを一つに合わせ てみよう」(2時間)

○それぞれ表してきたことを一つに合わせ、みんなでみよう。



4. 実践の概要

＜第1次＞

主に「おちばランド」で遊ぶ活動を通して五感をはじめとする様々な感覚をはたらかせてきた。教室のベランダの隅に落ち葉を敷き詰めたコーナーを設け、そこで自由に遊んでもいいことを子どもたちに告げると、ほとんど全員が足の裏で落ち葉のじゅうたんの感触を確かめるようにぴよんぴよん跳びだした。そのうち寝転がって全身で落ち葉の感触を確かめたり布団のようにかぶってみたいりする子どもたちも出てきた。子どもたちは「くすぐったい。」「気持ちいい。」「葉っぱの匂いが紅茶みたい。」「いや、桜餅の匂いがする。」など、様々な感覚をはたらかせての感想を述べていた。おちばランドでただ遊ぶだけでなくきれいな色やおもしろい形の葉っぱや枝などを用いて飾り付けをしたり自分たちが心地いいと思うソファを作ったりしていた。後日、はちまきで目隠しをしてペアでおちばランドの中や校庭を歩いて触覚や臭覚などをより刺激する活動を行った。やはり今までにした活動と比べて敏感に感じるようだった。

< 第2次 >

ここではまず、「どんなものが見えたか」「どんな音が聞こえたか」「どんな匂いがしたか」「どんな手ざわりがしたか」「体全体でどんな感じがしたか」など、遊んできたことを様々な感覚でふり返り、それらを色カードにできるだけたくさん書き留めていき、次の時間で、遊んだことをもとにどんな活動が考えられるかについてもできるだけたくさん考え、色カードに書き留めていった。そして、これらのことをもとに自分なら遊んだことを表せるか考え決めていった。大きく分けて次のようなグループになった。

— <子どもたちが考えた「あらわす」活動> —

主に音で表す（風や雨の音，きれいな音などを作る）・主に動きで表す（葉っぱや風の動きなどを身体表現で表す）・主に絵本で表す ・
主に絵や工作で表す ・主に落ち葉のじゅうたんで遊んで表す

表す活動では，場所を広い特別教室に移し，1つのフロアでこれら5つの活動をそれぞれの子どもたちが行った。違うグループの友だち同士が互いに影響を与えあったり，または，同じグループ同士で意見を出し合いながら動きや音などを表そうとしたり，逆に自分たちの活動に没頭するなど，自分たちのやりたいことがはっきりしている分，一人ひとりが楽しみながら「次はどうしようか。」と考えながら活動している子どもが多かった。

< 第3次 >

ここではお互いがどのような表し方をしてきたか見合う場であったが，友だちの表してきた活動に大変興味を持って聞いたり見たり一緒に体験したりする姿が見られた。

絵本グループの子どもたちが作った絵本の一部が次のようなものである。



5. 成果と課題

- 子どもたちはおちばランドで跳んだり触ったり匂いを嗅いだりするなど様々な感覚をはたらかせて主体的に落ち葉の様子を感じようとするなど、「感じる」ことに没頭する姿が見られた。
- 「あらわす」活動では、それまでにしっかり感じる活動の時間を十分に確保したり自分のしたい表現方法を選んで活動するよう仕組んだことにより、子どもたちが生き生きと作品作りや共同活動などを行う姿が見られた。また次時の活動へも常に意欲が湧き上がっていることがふり返りからも伺えた。
- 多様な活動を一つのフロアで行う活動を行うことにより総合的な表現活動を試みたが、一つ一つの活動について十分には支援していくことができなかった。今後活動していくにあたり様々な教科の先生方や幼稚園の先生方にも指導に関わって頂くなど複数的人数で行っていく方法を模索する必要がある。

幼小連携学習開発部会 実践事例3 (Bグループ 保育)

主題「ご飯をおいしくいただく」～5年生さんに技を覚えてもらいながら～(幼稚園5歳児) はじめに

本部会においては、子どもたちのふさわしい経験や活動が単に体験すればよいものではなく、その中で様々な感動や気づきを獲得していくことが必要であるととらえている。また、体験を通して学ぶものとして「愛着」「認識の基礎」「実践力」という3つの柱を設定している。

幼稚園年長児の場合、3つの柱に即して具体的にどのような体験が本当にその時期にふさわしい経験や活動として考えられるのかを追究していくことが、「子どもの経験を階層的に生かす幼小連携カリキュラムの創造」につながるととらえている。

今回は従来から行っている田植え・稲刈りの体験をより豊かにしていくために、自分たちが収穫したお米を使って飯ごう炊爨をし、おむすびを作る活動を取り入れた。そのことで、3つの柱に即した様々な感動や気づきを獲得していけるように実践を行うことにした。

1. 子どもたちの実態(12月)と保育者の支援

毎年年長児は地域の方の協力を得て、田植え・稲刈りを体験させていただいている。特に稲刈りでは本物ののこぎり鎌を使い、稲を刈る体験を十分にさせていただいている。そのような「本物の体験」を通して、子どもたちは日頃食べているお米を大切に食べようという気持ちも育まれつつある。そこで、自分たちが収穫したお米をより豊かに五感を刺激するような飯ごう炊爨で炊き、更に自分たちでおむすびを作って食べることを通して、より愛着をもってお米の味をしっかりと味わわせたいと考える。

飯ごう炊爨では、電気炊飯器では味わえない様々な体験が期待される。例えば、火の熱さ・米を研ぐ時の水の冷たさ・燃える焚き木や煙のにおい・出来立てのご飯の味などを考えている。このような原体験は子どもたちにとってより豊かな感動をもたらすであろうし、実際に自分たちが田植え・稲刈りをさせていただいて収穫した米を食することで、やがてはより豊かに米の生長に親しんだり、気づいたりすることができると思う。

飯ごう炊爨はちょうど5年生が様々な活動を通して経験してきており、自分たちでは自信をもって活動することができる現状にある。おそらく彼らは年長児に極力分かり易く説明もできるだろうし、どうしても年長児にはできない所はどんな場面かということ状況をしながら見極め、安全にとりくめる援助者として、また年長児自身が「自分たちでもできた!」と主体的にとりくめたという自信を体得できるような援助者に徹することができることを期待している。そのために5年生が年長児の実態を把握しやすいように事前に出会いのひとときを設けたり、年長児が主体的に活動できるように彼らの思いを代弁したりするなどの保育者のかかわりを配慮する。

また、年長児に対しては、5年生の援助を土台にしながらも、自分たちでできる所は自分たちでして「自分たちでもできた!」という自信をつけさせたいと考えている。したがって、事前に練習しておけばできること、具体的には「お米を研ぐ」「サランラップでおむすびを作る」ということは家庭でもとりくめるように連携を図る。また、実際に火を使ってお米を炊くという感動ができるように、逆に電気炊飯器でスイッチ一つで簡単にできる方法も家庭でふれられるように連携を図る。

2. 保育の実際

(1) 月日 平成 15 年 12 月 5 日 (金)

(2) ねらい

- ・自分たちが田植え・稲刈りをして収穫させていただいたお米を自分たちで調理することで、収穫したお米の味をしっかりと味わうことを楽しむ。(愛着)
- ・お米を飯ごうで炊きながら、火の熱さ・燃える焚き木や煙のにおい・出来立てのご飯を味などを五感を通して感じる。(認識の基礎)
- ・5年生と一緒に飯ごう炊爨やおむすび作りにとりくみながら、自分たちでできることは自分たちでやり遂げる喜びを味わう。(実践力)

(3) 内容

*○児～5年生, ○男・○女～年長児をあらわしている。

<エピソード1>米を研ぐ

A児(5年生)が一生懸命米を研いでおり、b女(年長児)はそばでその様子を見ています。保育者が「幼稚園さんにもやらせてあげてごらん?」と声をかけると、「いや、これはね幼稚園さんには難しすぎるからできないと思うの」と答える。A児なりにどこなら年長児ができるのか、どこでは無理なのかということを考えての行動であることはうかがえる。しかし、b女にしてみれば自分たちでできるところは自分たちでやり遂げる喜びを味わわせたい場面であるので、更に保育者は「たぶん、b女ちゃんでもできるはずだからやらせてみてあげてごらん?」と声をかける。今度はA児は米の入った飯ごうを手渡す。b女はとても神妙な顔をしながら、慎重な手つきで米を研いでは水を流している。A児もそばでb女の所作を見守っている。できあがった時には二人とも満足そうな表情で焚き木コーナーの所に戻っていく。

年長児に対して、自分たちでできることは自分たちでやり遂げる喜びを味わうことをねらっていくために、5年生の方でも事前にどの場面なら年長児ができるか、どの場面では5年生がやるべきかを話し合っている。その上での本活動ではあったが、具体的にb女はどこまでできるのかということは、そばにいるA児の判断に委ねられている。それだけに、年長児の実態を把握している年長児担任が子どもたちの様子をよく把握しながら、個に応じた支援を考えていくことが必要である。

<エピソード2>米を研ぐ

C児が最初に米を研いだ後に、d女に「やってみる?」と言いながら飯ごうを差し出してみる。d女はうなずきながら、自分でやり始める。C児は見守っているが「もしかして米がこぼれたらいけん」と言いながら、d女が米を研いで水を流す際に、流れてくる水を両手でしっかりと受けるようにしている。保育者はC児が年長児にできるだけさせてみようという思いとそうはいつでも、もし失敗してしまったらどうしたらいいかという思いのはざままで出てきた行動に感動し、「C児ちゃん、ありがとうね。d女ちゃんも上手にできてよかったねえ」と声をかける。d女は「ああ、お水が冷たかったあ」と言いながらも喜んでいる。

C児がd女に極力自分でできることは自分でできるように考えて、自分の行動を工夫しているエピソードである。年長児に対して「自分たちでできることは自分たちでやり遂げる喜びを味わう」ことをねらう際には、5年生側の考えや工夫をしっかりと認めることも大切である。

<エピソード3> 焚き木で飯ごうを炊く

飯ごうのすぐそばで5年生も年長児もじいっと様子を見ている。最初は「くさあい」と煙のにおいを表現していた子どもたちも、そのうちに「あっ、何だかごはんのにおいがしてきた」ということに気づいている。保育者がそばに行くと、子どもたちはやはり自分の感動を聞いてほしくて、「煙がモクモクしてくさかったけど、ごはんのいいにおいがしてきたよ」「目が痛くなるくらい熱かったよ」とてんでに言っている。保育者は一人一人の思いを受け入れるように聞いているし、そばで聞いていた5年生は「それはね、熱くて目が痛いんじゃないよ」と客観的につぶやいている。そばにいた年長児は何気なく聞いている。

自分のすぐ身近で火が見えるだけに、子どもたちはじいっとその様子を見守り、においのわずかな変化でもよく感じ取っている。幼稚園では全園児を対象に11月に焼いもを園庭で行っているが、その際には比較的大きなたき火にしているだけに、安全面を考慮してたき火と子どもたちの距離を離している。そこでは、ここまでの細やか変化には気づくことができづらい。という意味では今回のような飯ごう炊爨の活動は、火の熱さ・燃える焚き木や煙のにおいを五感を通してより豊かに感じる事ができたと考えられる。

また、子どもたちの感動に対して保育者や5年生が様々な反応を示している。子どもたちの感動や認識の基礎は、自分の感動を受け止めてくれる存在とともに、いろいろな考え方や気づき方をしている存在を見て感じることで育まれていくのだろう。

<エピソード4> 焚き木で飯ごうを炊く

5年生は飯ごうの中のお米が炊けているかどうかを判断するために、木切れを持って来てふたの上を押さえて確かめている。どうやら飯ごうの中の水分がなくなったら木切れを伝わってくる振動がなくなり、それが炊き上がりの目安らしい。何度か5年生は確かめながら、そばで様子を見ていたe男に「やってみる？」と木切れを手渡してみる。e男はうなずきながら、5年生と同じようにやってみる。辺りはにぎやかな状況ではあったが、e男はふたの上を押さえた木切れ一本に集中していたのだろう、そのうちに「あっ、ドクドクしてる！」ということに感動しながら気づいている。

木切れから伝わってくるかすかな振動を感じとることが年長児にもできるということは保育者としては全く予測していなかっただけに、ハッとさせられたエピソードである。子どもたちにとって魅力的な活動の中では、自分の五感をフルに発揮することができたということがうかがえる。

<エピソード5>味見をする

いよいよお米が炊きあがり、飯ごうのふたを開けながら「味見をしよう」ということになる。まずはグループの一人の5年生が味見をし、「幼稚園さんにも味見させてあげんと」ということになる。「でもね、これ熱いんよ。よし、じゃあちよつと待って」と言いながら、まずは5年生の手のひらにご飯をほんの一握り乗せて少しさませたうえで、更にほんの少しずつそばにいる年長児たちの口に入れていく。まるで円陣を組むかのように同じグループの子どもたちは寄り集まりながら、5年生に向かって「あ〜ん」と口を開けながら出来立てのご飯を味見する。熱すぎもせず、子どもたちはご飯のおいしさとともに、ちよつぱりずつ分け合ってみんなで味見するその雰囲気を楽しんでいるようであった。

このグループの中にいたf男は家に帰って母親に「今日はねえ、とっても楽しかったんよ。お兄ちゃんたちとハチャメチャいっばいして楽しかったんよ。」と述べている。出来立てのご飯をちよつぱりずつ口を「あ〜ん」と開けて食べるというその雰囲気などを、f男は「ハチャメチャいっばいして楽しかった」と表現しているのだろう。子どもたちが五感を十分に生かすためには、のびのびと五感が発揮できるような開放的な雰囲気も大切である。

<エピソード6>おむすびを作っていた

あらかじめ家庭で練習してきているだけあって、作り方そのものには個人差はあるものの、とにかく自分自身でおむすびを作れたことが嬉しくて「こんなのが出来たよ」と保育者に見せてくれる。ほとんどの子どもたちが「おいしい!」「何だか甘いねえ」と新米の味とともに、自分で作れた喜びを感じている。そんな中で1グループほどご飯に混ぜる塩の量が多すぎて「からあい!」と悲鳴をあげている。とても辛いのでちびちびとかじるように少しずつ口に入れ、口に入れる度に顔をゆがめている。それでも途中で「もういらぬ」ということは言わずにグループの友だちとベンチに並ぶように座って時間をかけて食べている。

このグループの中にいたf女は後で「おむすびを作った時には本当はからかったけど、おむすびしたのが楽しかったよ」と述べている。自分自身でおむすびが作れたことと、みんなでおむすび作りをした喜びが支えとなってこのような姿が見られたと考えられる。

3. 成果と課題

今回の活動を行うにあたって、年長児のこの時期に飯ごう炊爨によるおむすび作りが本当にふさわしい経験や活動なのだろうかという思いもあったが、実際に行ってみると子どもたちにとってはこの時期にふさわしく先にあげたようなねらいに向かっていける活動であることが分かった。具体的には次のような成果と課題が見られた。

○愛着に関して

- ・自分たち自身で作ったおむすびは、エピソード6にあるようにたとえ塩辛くても食べることができるくらい愛着を感じる事ができることが分かった。このことは、事前に家庭でもおむすび作りの練習をした際に「自分で作ったおむすびはとてもおいしいらし

くて、何個も作っていたのに、あっという間にたいらげていてびっくりしました」という子どもの姿を述べる母親の声からも理解できる。

○認識の基礎に関して

活動後に子どもたちの感想を聞いたところ、次のような声が返ってきた。

- ・ マツボックリをいっぱい入れると、火がポーポーなって面白かったよ。
- ・ 新聞紙を折って火をあおいだら、火が燃えたのが面白かったよ。
- ・ 最初飯ごうを置いたとき目が痛かったけど、あとから水がたれてきて「あれ？」って思ったよ。
- ・ 飯ごうを火の上に置いたら、あわがブクブク出てきて、そのうち黒こげになったのが面白かったよ。
- ・ 飯ごうを置いて何分かしたらふたが上に行ったり、下に行ったりしたよ。 など

- ・ エピソード3・4や子どもたちの感想などに見られるように、飯ごう炊爨をする際の火の大きさが程よいこと・自分たちのお米を炊いておむすびを作るという具体的な目的意識があることで、子どもたちは身近に火の熱さや、燃える焚き木や煙のにおいを感じやすく、煙のにおいの変化・飯ごうからしたたる水分の変化・水蒸気の圧力というようなこまやかな部分まで感じたり、気づいたりすることができていたようである。
- ・ エピソード1・3・5に見られるように、子どもたちが五感を十分に発揮しながら感じたり気づいたりするためには、子どもたちの興味や関心をひきつけるような魅力的な活動・自分の感動を受け止めてくれる存在・いろいろな考え方や気づき方をしている存在・開放的な雰囲気などが必要であることが改めて分かった。
- ・ 活動中や活動後になるべく一人一人の子どもたちに、よく感じたり気づいたりすることができる喜びが味わえるように、声をかけたり子どもの声を聞きとったりすることを心がけてきた。しかし、この活動を通して具体的にどのような姿が「五感を通しながら感じる」姿なのか、一人一人の姿をどのように評価していくのかということがあいまいだったように思う。このような姿が具体的に小学校以降のどのような教育内容につながっていくのかということも明らかにしながら、年長児のこの時期にふさわしい「五感を通しながら感じたり気づいたりする姿」とはどのような姿なのかを掘り下げていきたい。

○実践力に関して

- ・ 今回の活動に関して、自分たちでできることは自分たちでやり遂げる喜びを味わうことを年長児のねらいの一つにあげていたので、5年生は事前に一つ一つの活動に対して「幼稚園さんができるところ」「一緒にするところ」「5年生だけがするところ」を検討している。したがって、大枠としては年長児にできることはどのようなことかというイメージはついている。しかし、実際の活動の中では年長児は個人差が大きいので、エピソード1・2であげているように、保育者が個に応じた援助をしていく必要があるだろう。
- ・ 先に述べた5年生の事前の活動の中で、「まきを組む」活動は幼稚園さんも一緒にするのかどうかということを検討する場面で次のような発言が見られた。(まきを組むことは難しく、5年生の以前の活動でもなかなか上手くいかない場面もあったらしい)

「何回も失敗するかもしれないけど、ぼくたちだってたくさん失敗しながらできるようになってきたんだから、5年生がサポートしながら幼稚園さんにもやらせてあげたらいいと思います」

「でもサポートするといっても、幼稚園さんが一生懸命したのを直されたら面白くないと思います」

「それに時間がかかるかもしれない・・・」

「1回失敗してもやり方を教えてあげたら、時間がかからないと思います」

このような意見はまさに保育者の方が学ばなければならない内容であることをまざまざと感じたものであった。子どもたちに自分たちでできることは自分たちでやり遂げる実践力を育てていくためには、失敗も恐れずに挑戦していけるような場の設定や保育者の支えをおおらかに仕組んでいくことが大切である。

このように「飯ごう炊爨が年長児のこの時期にふさわしい経験になり得た背景」として次のことが考えられる。

○日常的に行われている異校種交流活動

本学園では幼小中一貫教育が特色であるので、日常的に異校種交流活動が行われている。5年生と年長児との今回の活動は出会いの活動(焚き木拾い)を含めて2回目であったが、双方とも比較的抵抗も少なくかかわり合うことができた。そのことによって、ねらいに向かっていくことができたように思う。

○様々な活動(特別活動など)を経験してきている5年生の存在

今回の活動以前に、5年生はキャンプ活動などの際に飯ごう炊爨を経験してきている。失敗も乗り越えながらやり方を学んできているので、年長児自身にも自分でできることは自分でできる喜びが味わえるように考えたり、年長児に分かり易く教えたりすることができやすかったのではないだろうか。

○日常的に行われている教師同士の交流

今回の活動は、幼小連携部会で子どもたちの実態や教師の願いをお互いに話し合う中で生まれてきた活動である。お互いの思いを何度も出し合い、話し合うことで、より子どもたちにふさわしい体験を考えることができたように思う。

4. おわりに

本部会では身の回りの自然や地域社会にかかわる体験に焦点を当て、「愛着」「認識の基礎」「実践力」という3つの目標を設定しながら、「子どもの経験を階層的に生かす幼小連携カリキュラムの創造」に向けて研究を進めてきた。これまでの実践を通して、今後の課題として次のことが考えられる。

それぞれの体験がその時期に本当にふさわしいのかを検討していくためには、体験の中で子どもたちにとって何が育っていくのかを具体的に予測し、そのために保育者はどう援助し、どのような姿を「ふさわしい」として評価していくのかを明確にしていく必要がある。幼児教育は年齢が幼い子どもたちを対象としているだけに、個人差も大きく、したが

って一人一人に応じた幼児理解や評価を大切にしている。それゆえに、ねらいとしては大きくあるいは長期的に向かっていけるものとして設定されている。それが幼児教育の特徴でもあるが、逆におおまかにとらえ過ぎて、具体的に何が育とうとし、どう評価していくのかといった視点があやふやな傾向もあるのではないかということを、小学校教諭の話し合いを進める中で気づいてきたことも事実である。幼児教育の独自性や子ども一人一人の発達の過程を大切にすることと、育てたい子どもの姿とそれに対する評価を具体的に明らかにしていくということを、バランスを大切にしながら考えていきたい。

1. 本単元の目標

この単元は、「公共」の領域の内容である。駅のコンコースの施設・設備のどんなものが、何のために、どんな人のためにあるのかということ調べ、見つけたことや考えたことを文や絵地図、表などに表していく。これらの活動を通して、公共物は様々な人々が利用するものであることに気づかせることができる。

「環境」科の単元目標は、教科目標の3観点を基礎に「愛着」「思考」「表現」「実践力」の4観点で示すこととした。「思考」「表現」については、気付きを広げたり深めたりするための考え方と表し方という点から目標を設定した。本単元の目標は、以下のとおりである。

[目標]

(愛着) 施設・設備が、何のためにあるのか興味をもって直接自分で調べることができるようにする。

(思考) 比較することによって、同じ種類のものでも状況や目的に応じて形態や数などが違っていることから、施設・設備の役割について考えることができるようにする。

(表現) 比較したことを表に表すことで、何がどのように違うのか考えるには、表が効果的であることに気づくことができるようにする。

地図を用いると施設・設備の位置や分布を示すのに効果的であることに気づくことができるようにする。

(実践力) 疑問に思ったことを自分で調べたり、尋ねたりするとともに、気づいたことをまとめることができるようにする。

2. 本単元での認識の基礎

本稿では、認識の基礎の育成を中心に述べていく。認識の基礎を、事象の特性や関係の理解につながる体験を積んだり、思考方法や表現方法を身につけたりすることと捉えている。この単元では、次のような体験をさせたいと考えた。

- ・駅の施設・設備を実際に見学する。
- ・同類のものの構造を比較することを通して、その違いからそれらを使う人との関連を考える。
- ・「もしも〇〇だったら」(なかったら、ちがうものだったら、同じだったら等)と考えることによって、設置されている意味を考える。
- ・比較したことを表に表す。
- ・施設・設備の位置や分布を絵地図に表す。

3. 認識の基礎を育むための本単元での方策

①前単元との関連

前単元「しんごうきのひみつ見つけたんけん」では、押しボタン式信号機の設置理由について、一般の信号機の設置されている場所と、車や人の交通量、通行の多い時間帯、周囲の建物の様子などの違いを比較、関連させて考えた。施設・設備だけでなく、周囲

の状況にも着目して考えることが期待できる。

②比較，関連づけを考える話し合い活動

学級全体で，共通の施設・設備に焦点をあてた比較や関連づけの話し合いの後に，各自の関心にもとづいた探検活動をすることによって，比較，関連づけを，一人ひとりが行えるようにしていく。

③実態に沿いながら，意図をもった題材の選択

似た種類で形態が違うもの，使う人に合わせて工夫がされている施設・設備の候補をあげ，各自の関心にもとづいて選択できるようにする。

④ワークシートの活用

比較するための表と絵地図を繰り返し使う場を設ける。比較するための表は，本単元では，第3次の話し合い活動の中で，各自が記入した後に，全体で意見の交流を行い着眼点の交流ができるようにする。絵地図については，探検の際に実際に位置を確かめながら記入できるようにする。そして，報告書作りの際には，カードを選択できるようにしておき，その中に，表，絵地図も入れておく。

4. 単元の概要

第1次 安心に役立っているものの予想（1時間）

第2次 安心に役立っているものを探す探検（2時間）

第3次 違いを比べて安心に役立つひみつを見つけ

1時（階段とスロープの構造の違いの比較）（どんな人が安心して使えるか）

2・3時（スロープがなぜ安心に役立つか）

第4次 一つひとつのひみつをくわしく探検（2時間）

（各自が選択した施設・設備の見学）

第5次 探検報告書作り（4時間）

第6次 探検報告書を読み合おう（2時間）

5. 全体で比較を行う授業の様子

（第3次） 小単元の目標

スロープと階段を比較し，構造や役割について発見したことや考えたことを交流することで，様々な人が安心して通行できるように作られていることに気づくことができるようにする。

<1時>

前単元の「しんごうきのひみつ見つけたんけん」の学習を想起させ，設備は状況によって形態に工夫がされていることと，比較することによって事物の特徴を捉えやすくなることを確かめ，「安心してつかえるための ひみつ見つけたんけん ちがいをくらべて，ひみつを考えよう。」と学習課題を設定する。そして，教師が提示した写真を手がかりに，スロープと階段を比較し，見つけた違いを各自表に書き出す。その後，見つけた違いを発表し，構造の違いを確かめた上で，どんな人にとっての安心に役立っているかを話し合う。

< 2・3時 >

スロープと階段の構造の違いについて子どもたちが前時に見つけたことを確認する。その後、「スロープと階段それぞれどんな人が安心して使えるか。それはなぜか。」ということを問いかけ、各自考える時間、2～4人で相談する時間をとった後、考えを交流していく。

スロープの方が安心して使えるのはどんな人かを考えを出させた後、なぜ、スロープの方が安心して使えるのか考えることによって、スロープの構造との関連に着目させていった。さらに、スロープが様々な人にとって安心して使えるのなら、「もしも、スロープだけだったら」と問うことによって併設されている意味を考えさせていった。

6. 考察

子どもたちが選択した施設・設備の学習を進めていく際、子どもたちが用いた考え方の傾向から、第3次までに学習したことがいかされているかを考察していく。

[方法]日記（各自が選択した施設・設備の探検の日及び探検報告書づくりを行った日の2日分）と探検報告書に記述されている内容から子どもたちがどのような考えのもとに活動を行っているか分類を行い、傾向をみる。

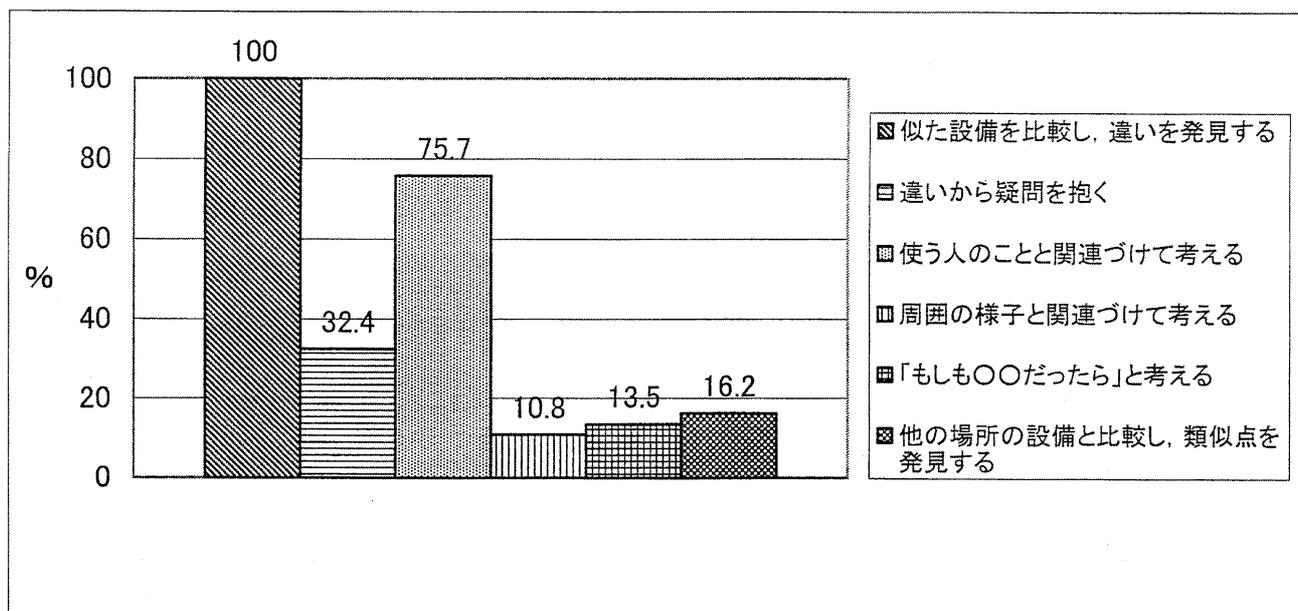


図 第4・5次での子どもの考え方

クラス全体に対して、どのくらいの割合の子どもがそれぞれの考え方を行っているかを示したものである。

グラフ及び記述内容から次のようなことが考えられる。

- ・ 比較をして、色、形、数、大きさなど外観から分かる違いについては、全員が見つけることができている。75.7%の子どもたちは、施設・設備を使う人のことを想定して、考えることができている。これらのことから、第3次までに学習してきた「比較して考えること」「関連づけて考えること」が、個別の学習の中でもほぼ生かされていると考える。
- ・ 違いから疑問を抱いていることについての、文章や絵の表現は、32.4%であるが、疑

問をもとに探検活動を行ったり、探検報告書で設備の構造の違いや位置、使う人などについてのクイズを作ったりしており、疑問をもとに活動を進めていると考える。

- ・ 周囲の様子との関連づけでは、施設・設備がどのような場所に設置されているか理由を考えている。

例えば、「消火器は火事の火元となりやすい場所に設置」「公衆電話は、行き帰りにかける人が多いだろうから出入り口に設置」などである。

- ・ 「もしも〇〇だったら」という考え方では、「もしも車椅子用のトイレがなかったら」「もしもゴミ箱が種類別になっていなかったら」「もしもコインロッカーが全部600円だったら」などと考えることで、施設・設備の役割を考えていた。
- ・ 他の場所の施設・設備と類似点を見出している子どもは、車椅子用のトイレについては、病院や大型スーパー、火災報知器や公衆電話は、学校を想起しており、他の公共施設との共通点を見いだしていると言える。

7. 成果と課題

- ・ 全員が比較することによって違いを見出せたこと、多くの子どもたちが施設・設備とそれを利用する人のこととを関連づけて考えたことは、気づきが深まる過程を示している。しかし、約25パーセントの子どもは、人との関連にいたっていない。その子どもたちも、活動の際の会話では、その施設・設備を使う人のことを考えている発言もあった。記述されていないということは、まだ十分には意識されていないと考えられる。
- ・ 探検報告書の中に絵地図と表を利用した子どもが、それぞれ73%と21.6%見られた。位置や分布を示すために絵地図を使うと便利であることは多くの子どもたちが感じとったようである。比較の表については、今後も、繰り返し実際に表したり、読み取ったりする体験を重ねていくことが必要であると考えられる。